

# 「平成会」がゆく

## 平成元年卒も、はや40。やはりどこゆく？ 平成会

とある会社のOB訪問。学生達の社会へ出る抱負を聞く合間に、OBの頭には依頼原稿の締切りがよぎり、ふと考える。

「本年のテーマは「上京」。依頼原稿のテーマは「同好会がゆく」。大河ドラマみたいな御題だ。では景気よく、坂の上の雲をつかまばかりに、若者らしい紹介を書こうかな。」

が、同時に気付く。「あかん。そもいかん。」何故なら、このOB、本年ジャスフォー（JUST40＝ある意味アラフォーよりも切実）なのだ。平成会と言いつつ、平成も元年卒だと年齢的には立派な大人。この現実をきちんと認識し、以下、脈絡なく、回顧・自省しながら、「平成会」紹介します。

### 平成会 その始まり

- ・平成6年卒山口君、早川君（当時20代前半若者）の勢いで強引に平成学年幹事が集まり、組成。
- ・一説には当時若手と言われた平成一桁年卒業生（繰り返す、当時20代）を結集しようという、昭和50年前半卒学年幹事の意図が大きいと言われているが定かではない。
- ・会長は斉藤利幸（平成元年）。が、この男の力量から推測するに、多分、まつりあげ以外の何ものでもない。おそらく酒席の流れで決まったものであろう。
- ・組成時期の詳細は不明。酒席であったため、人々の記憶からは消えている。

※歴史上に先例を求めれば、新撰組の組成経緯に近い形で進められている。事実上の発起人である山口君は仕事のため関西へ去り、黒幕は不明、残された会長は途方に暮れ、後の祭り。まあ、よくある日本型組織の組成とその後の展開といえよう。

### 平成会 その活動内容

- ・年1回は必ず総会を開催する。総会というご立派だが、要は各学年から人が集まり、高高という共通点で盛り上がっているだけといえないことはない。
- ・こうした会合は一回きりで自然消滅するのが通例だが、推測するに10年程継続して行っている。このあたり、東京玉翠会が継続発展していることに符合する、と筆者的には勝手に思い込みたい。

※総会時は80名強となる。人数が減ることはあまりないので、楽しい会になっていると、会長は勝手に自負している。が、実際は集まってくれる一人一人のおかげ。それぞれに高生らしいスマートさがあり、楽しい時間の中、相互刺激ができるのも魅力の一つになっている。

### 平成会 その運営

平成一桁年+S63年卒学年幹事により成立している。昭和63年佃さん・鞆さん、平成2年三好君、平成3年吉野さん、平成4年河西君、平成5年白瀬君、平成6年片山君、平成7年佐々木さん、会長（平成元年）が中心メンバーである。どの人がどんな活躍をしているのか？それは君、とにかく参加して実見いただきたく存じます。

※日本型組織の会長である以上、各メンバーの人となりは会長の口からはいえない。参加あるのみ。それが平成会を知る唯一の手掛かりと思ってもらいたい。

### 平成会 今後の行方

- ・今後も継続予定。
- ・が、このパワーを何か社会的な貢献へ結び付けることができないうか模索中。

→このあたりは平成7年伊藤さんと相談しながらかな。

※「平成会」どこへゆくのか？よく東京玉翠会内で多くの方に聞かれます。どこへいくのかわからないまま、坂の上の雲をつかみに行くのが若者の特権と思ってましたが、そろそろ方向性は決めておきたい今日この頃です。（いい歳こいた大人がこれではいかんのですが・・・すみません。）

さて、再び現実。とあるOBは学生の話に再度集中して耳を傾ける。高校を卒業して上京、社会へ出る。このよくある生き方は、今後もしばし社会の中で継続されるであろう。が、だからこそ、OBは自身の経験を踏まえ、学生に伝えることにしている。「仕事以外に何かコミュニティをもって社会人として生きていく」ことを考えた方がいいと。現代という時代、「坂の上の白い雲」はときおり風で流されるかもしれないから、心に余裕をもって、道中歌いながら歩いていった方がいい。その手法は人それぞれだが、少なくとも高卒の学生には、平成会が曲がりなりにあり、それは東京玉翠会に繋がっている。道中おもしろおかしく歩くに、その財産は大きく、高生であったことはもっけの幸い。同窓会というコミュニティも、あなたのその道中に加えていこう。

と多少はカッコよく書きながら、実際は、S61年のおかげで成功するであろう、本日の東京玉翠会総会とそこに集まる平成会メンバーと楽しく過ごすことを期待して、今宵も遊ぶこととする。

### 連絡先

斉藤 利幸 (H元年卒)  
t3saito@par.odn.ne.jp